

令和元年6月13日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770022

研究課題名(和文) 継続型混交を許容する写本系統の推定：『プラカラナ・パンチカー』校訂研究

研究課題名(英文) Estimation of the phylogeny of manuscripts with successive contamination: critical editing of the Prakaranapancika

研究代表者

志田 泰盛 (SHIDA, Taisei)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60587591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本課題は『プラカラナ・パンチカー』第9章の批判校訂を主眼としたもので、10種の手書き写本と3種の先行刊本に基づき再校訂し、当該章が主題とする「音声の永遠性論証」について分析するものである。

2018年7月の第17回世界サンスクリット学会での時点で、校合が未完了であったマラヤラム文字資料2種を除く11種の資料について校合を完了し、各資料の性格分析と写本間の系統分析を発表した。写本については、北インド系および南インド系のヴァージョン群に二分することが可能である点、また、マイソール東洋学研究所所蔵のテルグ文字写本が南インド系の低位祖本の読みを保持している可能性がある点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀に同一の都市から出版された『プラカラナ・パンチカー』の2種の流布本は、大きな読みの違いを持っている。その校訂方針の差異に関する実証的解明も射程に入れ、南北インドから収集した10種の一次資料に基づいた再校訂により、南北2つのテキスト・ヴァージョンの存在を明らかにしたとともに、当該テキストについては、マイソールのテルグ文字写本が南インドの低位祖本(hyparchetype)の読みを保持している可能性を示した点は、今後のテキスト研究および中世インドの思想史解明の一石となりうる。

研究成果の概要(英文)：This research project aims the critical re-editing of the ninth chapter of the Prakaranapancika, where the author tries to prove the eternity of sound, or of each phoneme, based on ten kinds of manuscripts and three previous editions. At the occasion of the 17th World Sanskrit Conference in July 2018, I presented the analysis of the characteristics of each materials and the mutual relationship among eleven kinds of materials, except two ever non-collated Malayalam manuscripts at that time. In the presentation, I clarified that two texts-versions, Northern recension and Southern recension, can be estimated, and the only Telugu manuscript from the Oriental Research Institute, Mysore, retains possibly the reading of the hyparchetype of Southern recension.

研究分野：インド哲学

キーワード：再認

## 1. 研究開始当初の背景

古典インド聖典解釈学派の二大分派のうち、ブラバーカラ派に属する思想家シャーリカナータ (Śālikanātha) の哲学作品 *Prakaraṇapañcikā* (PrP) の先行出版テキストとして、Śrīmukundaśāstrī により校訂されチョーカンパ・サンスクリット・シリーズから 1904 年に出版されたもの (以下、Ch 版) および、Subrahmanya Śāstrī により校訂されベナレス・ヒンドゥー大学 (以下、BHU 版) から 1961 年に出版された 2 つの刊本が流布しているが、同じ都市から出版されたこの 2 つの先行刊本は、多くの異読を持つ。そのうち、後者の BHU 版には、南インドのマイソール東洋学研究所のテルグ文字写本を底本にしたという校訂者の注記があり、いわゆる南インド系の読みを多く採用したことが伺われる。

また、PrP 中のそれぞれの章 (prakaraṇa) は、技巧的な章題が付され、また各章の冒頭には先師に言及する詩節が掲げられていることなどから、各章の作品としての独立性が高い。実際に、単一の章だけを伝承する写本も存在しており、また、章の順序については先行出版の間でも相違が見られ、入手済の写本の中にはさらに異なる章順を伝承するものもある。

そのため、写本の系統を検討する際には、いわゆる継続型混交 (successive contamination) の可能性も検討する必要があると、とりわけ章を跨ぐ際の写本間の関係の安定性に注目する必要がある。

また、PrP の各章は、韻文のみで構成される章、韻文と散文が混在する章、冒頭詩節を除きほぼ散文のみで構成される章に分類できる。先行研究の中には、韻文と散文が混在する章の中で、韻文だけでは意味の通らない箇所に着目し、その議論展開のギャップを埋めるべく、先行刊本の校訂では散文中に埋没してしまった韻文を抽出したのものもある。その他、韻文だけで構成される第 5 章と韻文・散文が混在する第 6 章は、内容の重複もあり、そのいずれかが PrP の構成要素でなかった可能性も指摘されているなど、従来の校訂については見直すべき点もある。

本研究課題の代表者は、BHU 版が底本にしたものと思しき、マイソール東洋学研究所所蔵の写本のデータを含む、10 種の写本と 3 種の刊本のデータを入手できたことを踏まえて、PrP のテキスト研究の起点として、第 9 章の再校訂・翻訳・内容分析を主眼とした研究を計画した。

## 2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、PrP 第 9 章の再校訂にある。とりわけ、北インド系・南インド系の両方の写本群を包括的に校合することで、流布版である Ch 版と BHU 版の大きなテキストの相違の根拠を剔抉するとともに、蒐集済の 10 種の一次資料を基に、北インド系・南インド系それぞれのテキスト・ヴァージョン (recension) の低位祖本 (hyparchetype) を推定することは可能か、という点も精査する。

また、今回の一次資料のうち、古典テルグ文字の写本は、その文字体系の点で筆記者の表記法のクセが強く、貝葉自体の欠落も多く、翻刻の客観性と信頼性、そして訂正可能性を保證することで、今後の同写本の別の章や、別の筆記者によるテルグ文字の翻刻研究にフィードバック可能なデータを提供することも目的とする。

全 10 種の一次資料および先行する 3 種の刊本を校合しながら、再校訂テキスト、翻訳、内容分析の出版を目指すものである。

## 3. 研究の方法

まず、テルグ写本の翻刻のために、林晋教授のチームが開発した協働翻刻支援ソフト SMART-GS を活用した。予備的研究として、2013 年 7-8 月 (本研究課題の申請中) に R. Sathyanarayanan 博士 (フランス極東学院ボンディシェリ校) との共同研究が首尾よくいったことを踏まえ、2016 年 11 月に「Telugu 文字サンスクリット写本翻刻ワークショップ」および「翻訳支援ツール SMART-GS の実践ワークショップ」を開催した。このワークショップを中核に、PrP のテルグ文字写本の当該章の翻刻を完了するとともに、デジタル化されたテルグ文字の字母表を再利用・アップデート可能な形で公開する。一方、7 種のマラーヤラム文字写本については、上述のテルグ文字よりは可読性が高いが、やはり翻刻の客観性を保つために、可能な限り SMART-GS を利用して翻刻した上で、校合する。

その他の写本の校合データも含む批判校訂テキストは、Academia.edu を用いて常時最新版を公開することで、他の研究者からのフィードバックの可能性も探る。

思想内容の研究として、当該章の主題である「音声の永遠性の証明」の根拠として、聖典解釈学派のもう一方の分派であるパッタ派の思想家は、2 つの観察時点で把握される同一性が、当該観測対象の時間的持続性を保証するという前提のもと、その同一性を把握する「再認」 (pratyabhi jñā [na]) という現象に時間的持続性の根拠を求める伝統的な見解を保持しているが、この 2 時点間の持続性が果たして無限の時間の永遠性を保証するかどうか、という点は無問に伏されているように思われる。パッタ派による上記のような「音声の永遠性論証」に対して、Śālikanātha は PrP において、「音声/音素にかんしては、まさに初見時において pratyabhi jñā が生じる」と論じており、同一の術語「pratyabhi jñā [na]」を用いつつも、その意図するところは、「再認」というよりはむしろ「直観」に近い概念として、各音素の永遠性の証明を試みているため、この二大分派間の差異についても、一次資料に基づき文献実証的に跡付ける。

#### 4. 研究成果

まず、本研究課題の本丸である PrP 第 9 章の批判校訂については、写本解読の遅れにより、2 種のマラヤラム写本の校合が未完了の状態であるが、それを除く 8 種の写本と 3 種の刊本については、校合を完了し、各一次資料の性格分析と写本間の系統分析については、第 17 回世界サンスクリット学会において発表した(2018 年 7 月)。

この発表では、BHU 版の先行刊本が参照したテルグ文字写本が、今回利用したテルグ文字写本と一致する可能性が極めて高い点、また、Ch 版がさらに先行する刊本の忠実な複写であるのに対して、BHU 版の校訂方針は、参照資料の折衷的な性格が強く、時に写本情報から大きく乖離するような読みの推定を行っている点を明らかにした。

また、「北インド系」と「南インド系」というテキスト・ヴァージョン群に二分することが可能であり、また、テルグ文字写本が、南インド系のテキスト・ヴァージョン群の中で、低位祖本に近い読みを保持している可能性がある箇所を数箇所指摘した。

その他、思想研究としての音声の永遠性論証における *pratyabhijñā* について、バツタ派の再認論を含む包括的な分類の研究としては、第 27 回西日本インド学仏教学会学術大会において口頭発表した他、Sucaritamiśra の *Ślokavārttikakāśikāṭīkā* の最新版の校訂の成果は、{<https://www.academia.edu/34278396/> および <https://www.academia.edu/27157168/> に公開中である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

志田 泰盛, 「釈滅無為の粗大消滅的解釈の展開」, 『哲学・思想論叢』34, pp. (33)-(50), 2016 年 1 月, 査読有.

Shida Taisei, "On the Date of Śivāditya: From the Viewpoint of the Theistic Definition of *pratyakṣa*", *Journal of Indian and Buddhist Studies* (『印度學佛教學研究』) vol. 63-(3), pp. (122)-(128), 2015 年 3 月, 査読有.

〔学会発表〕(計 8 件)

Shida Taisei, "Editorial Notes on the Ninth Chapter of the *Prakaraṇapañcikā*", 17th World Sanskrit Conference, 2018 年 7 月 13 日.

Shida Taisei, "The Non-Comparative Type of *pratyabhijñā*[na] Referred to by Śālikanātha", XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2017 年 8 月 21 日.

志田 泰盛, 「古典学分野の国際連携と技術イノベーション: 海外教育研究ユニット招致プログラム(人文社会系)の活動を中心に」, 第 3 回人文・社会科学系研究推進フォーラム, 2017 年 3 月 3 日.

Shida Taisei, "The Effect of Wind on Hearing Sound, and the Usage of the Word 'anuvāta-'", Lecture at Department of Indian and Tibetan Studies, 2017 年 1 月 10 日.

志田 泰盛, 「音声の永遠性論証における *pratyabhijñā*[na] スチャリタミシュラの刹那滅論批判部の校訂ノート」, 西日本インド学仏教学会第 27 回学術大会, 2016 年 7 月 30 日.

Shida Taisei, "Dialogical strategy of the exegetic school among diverse ideologies in classical India", Tsukuba Global Science Week 2016, Session 3 "Cross-cultural and Cross-religious Encounters in Historical Context", 2015 年 9 月 29 日.

志田 泰盛, 「釈滅無為の粗大消滅的解釈について」, 西日本インド学仏教学会第 26 回学術大会, 2015 年 7 月 25 日.

志田 泰盛, 「スチャリタミシュラの闇論」, 「インド哲学諸派における〈存在〉をめぐる議論の解明」2014 年度合同研究会, 2014 年 9 月 13 日.

〔図書〕(計 1 件)

【共著】Christian Coseru, Nirmalya N. Chakraborty, Purushottama Bilimoria, John Powers, Hari Shankar Prasad, Jessica Frazier, Raghunath Ghosh, Michael P. Levine, Monima Chadha,

Herman Tull, Brian Black, Mikel Burley, Knut A. Jacobsen, Elisa Freschi, ShashiPrabha Kumar, Stephen Phillips, J. L. Shaw, Douglas L. Berger, Chakravarthi Ram-Prasad, Taisei Shida, Andrew J. Nicholson, Thomas A. Forsthoefel, Stephen Kaplan, Christopher Bartley, Ana Laura Funes Maderey, Ian Whicher, William S. Waldron, Peter Gilks, Joseph Walser, Jay L. Garfield, Alex Watson, Sonam Thakchoe, Joseph Loizzo, Arthur Dudley, Jayandra Soni, Jeffery D. Long, Christopher Key Chapple, David Peter Lawrence, Jason Schwartz, Donald R. Davis, Jr., Loriliai Biernacki, Toshiya Unebe, David Mellins William J. Jackson, Muhammad Kamal, Balbinder Singh Bhogal, Damien Keown, Peter Paul Kakol, Thomas B. Ellis, A. Raghuramaraju, Bindu Puri, Anna-Pya Sjödin, Sharad Deshpande, Carl Olson, Joseph Prabhu, edited by Purushottama Billimoria with Amy Rayner, *History of Indian Philosophy*, Routledge 2018. (Udayana's theory of extrinsic validity in his theistic monograph, pp.214-222 を担当)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。